

[研究ノート]

## ウィリアム・ジェイムズと 1906年サンフランシスコ大地震

栗田 充治

1906年4月18日早朝、今日の基準でマグニチュード8.3と推定される大きな地震が、サンフランシスコを襲った。その後3日間、大火災が街を襲い、28,000棟が壊れ、焼失した。避難民は25万人に及んだという。地震による死者は3,000人に及ぶと推計されている。

解剖学、生理学、心理学、哲学などをハーバード大学で教えていたウィリアム・ジェイムズは、その後『プラグマティズム Pragmatism: A New Name for Some Old Ways of Thinking』として出版される内容の講義を1905年に行っている。当時すでに64歳、病気がちであった彼は、以前から教授職を辞めることを考えていたそうだが、スタンフォード大学から、好待遇で招かれ、それに応じた。

サンフランシスコの南約56kmに位置するスタンフォード大学に移ったのが、1905年12月であった。翌年の2月25日に学生と市民を対象に行った講演が『戦争の道徳的等価物 The Moral Equivalent of War』である。この内容はその後1910年に発行される。軍国主義で評価される軍人の高貴なモラルや精神は人間性を健全なものに維持するために平和な市民社会にも必要だと考えた彼は、戦争に代わる一種の社会貢献的「兵役」制度（青年男性に自然環境保全活動や炭鉱、漁業等の厳しい仕事に一定期間従事させる）の可能性をここで提案している。彼の提案はボランティアの「業界」でも注目されてきた。そして、彼の講演はサンフランシスコ地震のわずか6週間前であった。

1906年4月18日早朝、ジェイムズ夫妻はスタンフォード大学キャンパス内の家で大地震に遭遇した。大学の建物もかなり壊れた。その後、同僚と汽車でサンフランシスコに向かう。スタンフォード大学は、学期の残りの授業をすべて取りやめにしたので、改めて出かけたサンフランシスコ滞在中の9日間に、ウィリアムは100人ほどの市民に地震時の反応と心理状態について聞き取りをして回った。

地震の時の自身の様子や大学の状況、サンフランシスコの様子、被災者の心理状態については、同年6月7日に発行された小冊子『地震に対する心理的反応について On Some Mental Effects of the Earthquake』にまとめられている。以下、それを中心に見ていこう。

まず、スタンフォード大学内で遭遇した地震をジェイムズ自身がどう受け止めたか、ジェイムズはこう書き始めている。

私がハーバード大学からスタンフォード大学へ向かった1905年12月、最後の別れの言葉は、カリフォルニアの友人B氏の次の言葉だった。「君がカリフォルニアにいる間に、君が地震に見舞われて、現地の人々におなじみのものを知ることを期待する。」

そのせいか、4月18日朝、5時30分頃、スタンフォード大学キャンパス内の小さな家で目が覚め、ベッドが揺れるのを感じたとき、私が最初に感じたのは、その振動の仕方についての陽気な知覚だった。「おどろいた！これは全くB氏が言ったあの地震だ。」と私は独り言を言った。そして、揺れがだんだん強くなると、「なんてまた、素敵に素晴らしいものなんだ！」と私はつぶやいた。

無意識に立ち上がり、ひざまづき、振動が部屋をますます強く揺らすにつれて、テリア犬がネズミを振り回すのと同じように、顔を床に投げ出して進んだ。それから、家具の上にあったものがすべて床に滑り落ち、すさまじい音を出して、書き物机や食器戸棚にぶつかっていった。揺れが最大になったとき、壁にピシッとひびが入り、恐ろしいとどろき

音が外気に満ちたように思えた。そして、すぐにまた、同じことが続いた。その中で、人々が何かをしゃべっている小さな声が近くや遠くから聞こえるに気づいた。というのは、より安全な場所を求め、他の人と共感的な会話をしたいという強い欲求で寝間着姿のままで近所の住民が通りに出てきたからである。

カリフォルニア天文台の報告で分かったことだが、地震の揺れは48秒で終わった。揺れはもっと長く続いたと言う人々もいたが、私には、ちょうどそのくらいの時間に感じられた。私の場合は、そのときの感覚や感情が余りに強くて、地震に襲われた短い時間では、考えることも、省察することも、意志を持つことも不可能だった。

そのときの感情は専ら、喜びと称賛であった。抽象的で単なる言葉でしかない「地震」が、刺激に満ちた現実と多様な具体に翻訳された時の生き生きとした喜び。壊れやすい小さな木造の家が、激しい揺れに持ちこたえたことへの称賛。私は、恐れの類の感情はほんのわずかでも感じなかった。それは純粋な喜びであり、歓迎すべきことだった。

「行け」「もっと強く行け！」と私は叫んでしまった。

私は、妻の部屋に走り込んだ。彼女は、眠りから目覚めていたが、恐れというものは何も感じていない様子だった。私が後に聞き取りをしたすべての人々では、揺れが続いた間、殆どの人は「驚き」、本棚や暖炉の煙突の煉瓦などがベッドや枕に落ちてくる中で脱出を成し遂げ、その時、何らかの恐れを感じた人は非常に少なかった。

私が考えることができるようになるやいなや、私は、私の意識が地震の際にたどった特殊な過程を思い起こしながら認識した。その過程は全く自然発生的であり、いわば、避けることが出来ないし、抵抗できないものだった。

最初に、私は、地震を永遠に個別的な実態として擬人化していた。それは、友人B氏が予言した「地震」であった。この数ヶ月の間、私の意識の底にあり、思い出させていたものが、あの輝かしい4月の朝に、

私の部屋に押し寄せ、激しく、意気揚々と活気づけたのである。それだけでなく、地震は直接「私」に出現したのである。地震は私の背後からそっとやってきて、一瞬で部屋に押し入り、私のすべてをつかみ取り、自分自身を圧倒的に示した。意図とか意志というものは、誰の行動にも表れなかったし、誰の行動についても、その源や起源として働いた力をもっと明確に示すことはなかった。

次に、学内の様子はどうかであったか。

スタンフォードの状況を見ると、我々みんなの経験したことはとてもよく似ていた。家の煙突はすべて落ち、いくつかはてっぺんから底まで粉々に崩れた。居間は瓦礫に覆われ、壁の漆喰が床にばらまかれ、家具は至る所ひっくり返り、位置がずれていた。しかし、木造の家は、元の場所に収まっており、それらの家々では、窓ひとつ壊れず、ドアも上から下まで壊れていなかった。木造建築は素晴らしかった！みんな興奮していたが、初めのうちは、その興奮は、ある程度はほとんど喜びに近いものだった。ここにも揺れが数年続いても害をもたらさないような「現実の」地震があった。とりわけ、現地では、地震について語りたいという欲求、経験したことを語り合いたいという欲求が抵抗できないものとしてあった。(中略)

ほとんどの住民がその後の数日は戸外で寝た。それは、余震が起きたときの安全のためということもあったが、そのほかにも、自分たちの感情を鎮め、経験したことの異常さを十分に感得していただきたいためでもあった。キャンパスの庭から聞こえてくる早起きの少年、少女達たちのざわめきが小鳥たちのさえずりや素晴らしい天気と混じり合い、3～4日の間、喜ばしい夜明けの現象だった。

恐怖心を感じるいとまが無かったという受け止め方のよい例として、ジェイムズはスタンフォード大学の学生の話を紹介している。

大災害のすさまじさが恐怖を消してくれたという受け止め方のよい例がスタンフォード大学のひとりの学生によって提供されている。学生はその時、石造りの巨大な学生寮 Encina Hall の四階にいた。目覚め、揺れが地震であることを知ってベッドから飛び起きようとしたが、その瞬間、彼の足は身体ごと投げ出され、彼の周りに本や家具が落ちてきた。それから、恐ろしい、不吉な、きしむような轟音と共に、あらゆるものが飛び去り、煙突や、床や、けたや、壁などすべてのものと共に、三つの階を通り抜けて地階まで落下した。「これでおしまいだ。これで死ぬ」とその時彼は感じた。しかし、落下する間中、ほんのわずかの恐怖も感じなかった。学生の経験したことは地震にいやいや降参した例以外のどんな経験よりも圧倒的な例である。(学生寮全体の中心を支えていた重い煙突が落下していた。)

地階に落ちた学生は、垂木や瓦礫が周りに散乱しているのを見たが、彼の身体に突き刺さっているものや覆い被さっているものは何もなかった。その時、彼は日の光を見て、障害物をよけながらその光へ向かって這っていった。外に出たとき、彼は寝間着しか着ていないことに気づいたが、痛みは身体のどこにも感じなかったので、彼が最初に思いついたのは、彼の部屋に戻って見苦しくないような服を見つけようということだった。Encina Hall の階段は建物の端にある。彼は階段のひとつを使って四階へ上がったが、彼の部屋はもはや無かった。そこで、彼は初めて足の痛みを感じ、足を怪我していることを知り、今度は、階段をやっとの事で降りた。彼の話聞いたのは、地震後 10 日目だったが、彼は入院 1 週間たったところで、顔はやせて青白く、歩くのに松葉杖を使い、人から借りた着物を着ていた。

サンフランシスコ市内でジェムズは何を見、何を聞き取ったか。

サンフランシスコに戻ろう。スタンフォードから 35 マイル離れているので、そんなに遅くなく、自動車によって、崩壊したサンフランシス

コの恐ろしいニュースがもたらされた。市内の色々なところから火災が発生したが、消火のための水が絶たれてしまったという。私は幸運にも、サンフランシスコに行く唯一の自動車運搬貨物車（とても小さな貨物車だったが）に乗ることが出来、また、再び幸運にも、市内に残された唯一の汽車で夕刻サンフランシスコから逃れることが出来た。この幸運は、私と付き添いの勇敢な女性に、四時間の観察の時間を与えてくれた。私のすべきことは「主観的な」現象を聞き取ることだけだった。したがって、私は、我々を至るところで待ち受けた物質的な崩壊については何も語らない。それらの事柄については、新聞や週刊紙が十分な仕事をしている。正午までに我々はサンフランシスコに着いた。煙の嫌なおいが充満し、ダイナマイトによる爆破が始まっていた。軍隊や警察、消防士などが秩序を確立しているように思えたが、危険な住民がいたるところで縄で縛られていたり、監視されていた。酒場は閉鎖され、乗り物は調達されて使えず、動ける人は皆動いていた。

通りにいるすべての人々が、むき出しの坂道を、卵や幼虫のために急ぎ足で歩いている蟻のように、忙しくしているのは本当に奇妙な光景であった。市内のありとあらゆる馬、そして、行商人の荷車から自動車まで、車輪が付いているものすべてが、迫り来る火災の危険を避けるために家々から剥ぎ取られたものを詰め込んでいた。歩道には着飾った男達や女達が、カゴや何かの束や鞆を持ち運び、トランクを一時的にでもより安全な場所に引きずっていた。火災が広がり続けているので、すぐにでもより遠くへ引きずって行くのだ！。

より安全な地域では、家の入り口に住人が集まっており、周りに生活必需品を置いて、警告があればすぐに逃げ出す用意をしていた。私は誰一人食べている人を見かけなかったので、その日はみんな食事をしなかったにちがいないと思う。一般に狼狽と呼べる兆候はなかったし、無様な興奮とかおしゃべりも殆ど無かった。

みんなが、彼が為さねばならない仕事に根気強く熱中しているように

見えたし、彼らの顔つきは、何かしら、緊張、堅さ、重々しさが見受けられたが、感情の表れはなかった。打ちのめされたように見えたのは3人だった。とても貧しい様子のイタリアの婦人2人と彼らが抱き合っていた田舎の老婦人で、3人とも泣いていた。人々の顔つきから読み取れた唯一の内的状態は、身体的な疲労と「まじめさ」であった。(中略)

手中の現金だけがお金として通用した。お金持ちやその家族も、この点では、普通の人々と同じだった。乗り物の所有者は誰でもそれを役立てた。しかし、お金持ちも、乗り物無しで出かけなければならなかったし、最初の2日間の夜は裸の大地の上に敷物を敷いた上で、彼ら自身の腕で救い出したものだけを持って過ごした。幸いなことに、地震後の数夜は、乾燥して、比較的温かく、そして、カリフォルニア市民は、夏のキャンピングに慣れていたので、災害時の状況の中で苦しむことは、よその土地に比べるとかなり少なかったと思われる。雨になった4日目の夜には、テントや帽子が殆どの野外生活者に雨をしのがせた。

レベッカ・ソルニット著『災害ユートピア～なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』は、サンフランシスコ大地震発災後の市内の様子について、地元紙の記事などを駆使して、詳細な描写をしている。

発災後まもなく、倒壊した建物の随所で、様々な救出活動が行われた。ある質屋はパンを山のように買い込んで、被災者に配った。ミネラルウォーターを扱う店主は飲料水を提供し続けた。配管工組合は23日から1週間、無料で仕事をすると宣言し、500人の配管工が休み無く働いた。大手食肉会社の経営者たちは、発災当日から1週間、在庫の肉をすべて無料で配った。

ゴールデンパークに避難した人々は、あちらこちらで、自発的に、あり合わせのものを集めて、仮設のキッチンやカフェを始め、被災者に振る舞い始めた。そうした相互扶助のあたたかい空気の中で、被災者の間にも陽気な気分が広がった。

レベッカはジェイムズが詳しく書いていない事柄を強調している。それは、被災者を監視し、取り締まった地震後の軍隊の活動である。ジェイムズは、次のように、控えめにしか書いていない。

屋内では明かりを付けることが禁じられていたので、屋外の明かりと大火災によってのみ照らされた通りでは、サンフランシスコの罪人達は引き続き夜に最高のお祭り騒ぎを得たように思われる。しかし、彼らが、至る所に姿を見せていた合衆国軍隊の懲罰方法を恐れたかどうか、或いは、彼らが大災害の巨大さによって自らを祝ったのかどうか、彼らは殺され、そして、そのことは、その時も、その後も公表されなかった。

人間性にとって、唯一とても信じがたい事柄がその後生じた。それは、数百名の怠惰な「浮浪者達」が、公園に寝泊まりできること、彼らの胃袋を満たす食料貯蔵庫を作ることが出来ること、そして、ある場合には、帽子やテントなどの無料の配給が夏まで続くことを見いだしたことである。こうした保護された放浪の魅力は、端から端まで、人間性に対するサタンの最も危険なえさだったように思える。最初から盗みはあったが、それは、こそ泥的なささいな盗みに限られていたと私は信じている。

レベッカは、合衆国軍隊権力と州政府権力（消防と警察）とのせめぎ合いがあったことを指摘し、市民が暴徒化することを必要以上に警戒した軍隊による、過剰な取り締まりと暴力を紹介している。

軍隊は、消火活動をしている市民を追い払ったあげく、延焼を防ぐために強行した建物の爆破により新たな火災や延焼を起こしてしまった。ジェイムズは「ダイナマイトによる爆破」と書いているが、レベッカによると、実際に使われたのは、発火の危険がある黒色火薬であった。軍隊は、燃えている



建物のすぐ近くを爆破して、燃えやすい瓦礫を火に提供し、化学物質のある倉庫なども見境無く爆破して新たな火災を起し、延焼の危険の無い地域も爆破した。

瓦礫に埋まっている人を救出しようとした男性が、兵士の威嚇射撃に驚いて逃げ出して射殺された。モルモン教徒の避難所から全員出るよう命令された際に一人のボランティアが兵士に射殺された。地面にしゃがみ込んでいたアフリカ系アメリカ人に対して兵士が立ち去るよう威嚇したところ、彼は逃げだし、ほかの兵士に射殺された。銀行の出納係が金庫室を開けようとしているところを泥棒と間違われて射殺された。消火活動への協力を拒否した男達20人が処刑された。金庫破りの現行犯4人が射殺された。こんな記事が地元に出ている。こうした警備兵によって殺された市民は、50人とも、70人とも、或いは500人とも言われている。

こうした大災害時の混乱と無権力状況を過度に恐れる「エリートパニック」は、2005年8月にハリケーン・カトリーナに襲われたニューオーリンズでも再現された、とレベッカは、彼女の本の後の章で詳しく書いている。

ジェイムズに戻ろう。彼は、サンフランシスコでの見聞から二つの事柄が強く印象に残ったとまとめている。

回想すると、二つの事柄が私の印象に強く残っている。そして、その二つは、私の印象群の中で最も強いものである。どちらも、人間性について自信を回復させるものである。

第一の印象は、混沌とした状況から即興的に秩序が速やかに生まれたことだった。千人の人々の中には、統計的に見て、一定数の芸術家があり、運動選手があり、思索家があり、潜在的には良き兵士がいるように、緊急時には、一定の数の潜在的な組織者がいるのは明らかだ。事実として、大都市ばかりでなく、地方の小さな町の中にも、こうした生まれつき秩序を作り出す能力を持った人々が、民間人か、役人かを問わ

ず、最前線にすぐにやってくる。こうした人が誰も現れないということはありません、24時間以内に何らかの形でそうした人が出てこないこともあり得ないように思える。

その好例が次のエピソードである。ウィリアム・キース氏は太平洋岸の風景画家として優れた画家であり、数多く制作された彼の絵は、芸術的にも金銭的にも高く評価されている。キースの絵の大ファンであった2人の市民が、地震当日の早い段階で、彼ら自身の個人的な利害やほかのすべての利害を放り出して、キースの絵が展示されていると知っていたすべての場所に行って絵を救い出すことを自分たちの義務とした。彼らはキース氏の絵を額から取り出し、丸めて束ね、重要な絵を殆どすべて安全な場所に移した。

それから2人はキース氏を探し出して朗報を伝えた。キース氏は火災現場から遠く離れた場所にある彼のスタジオに残っていて、新しい絵の制作を始めていた。キース氏は彼の絵はすべて焼失したと諦め、大災害の償いをするために時間を無駄にしたくないと決心していたのである。

スタンフォード大学に近い人口1万人ほどの町、Palo Altoの住民組織の完璧さは殆ど滑稽でもある。町の人々は、サンフランシスコから無秩序な一団が大勢押し寄せることを心配していた。現実には、Palo Altoに入った被災者はごくわずかだった。しかし、24時間の間に、食料、衣服、病院、検疫、消毒、洗濯、警察、軍隊、キャンプや一軒家の宿舎、印刷された情報集、雇用など、すべてが多くのボランティア委員会組織によって用意された。

以上のような、準備の早さはアメリカ人らしいと言えるし、或いは、カリフォルニア市民ならではのものかも知れないが、どんな国でも、同じような危機的状況に際しては、傍観者を驚かすようなやり方で、そうした準備を行うだろうと、私は信じる。軍人のような仕事ぶりだといえるが、そうしたものは人間性に常に潜在しているのだ。

第二の印象は、至る所に見ることが出来た落ち着きであった。我々の

元にはすぐに東部から不安と悲しみが鳴り響くような手紙が届いたが、私は、かねてから信じていた次のことを、いま、十分に再確認した。それは、大災害を受け止める情けない態度は、当の被災者の立場よりも、むしろ、遠くにいる人々の立場であるということである。私は、カリフォルニアでは、「情けない」とか、感傷的な言葉を誰かが話すのを、たった一度も聞いたことがない。

「恐ろしい」「いやだ」という言葉は人々の口端にしばしばこぼれ出て来たが、いつも、一種の抽象的な意味合いで語られており、その時の表情は、身を切るような事態を嘆き悲しむのと同じく、大災害のすさまじさに驚嘆するようには見えなかった。話題が直接的に実際的なものでないときは、人々の話は、(とりあえず、私が滞在した9日間の間は)、悲しみよりは、不安の混じった興奮に向かっていると言っても良かっただろう。心が個人的な悲痛さを隠すのは、疑いない。しかし、話し相手の人も等しく不幸を受けているときに、人々の口は、自分の不幸にぐずぐずこだわっていることを恥ずかしく感じるのだ。

確かに、我々の通常の不幸の身を切るような部分は、その孤独という性格から来ている。我々が健康を失う、妻や子どもを失う、家が焼失する、お金が盗まれる、そして、そんな時でも、世の中は喜びの中を進み、我々を一方的に置き去りにして、彼らの仕事から我々を閉め出す。カリフォルニアでは、皆が、ある程度は、被災した。そして、個々人の悲痛さは、大災害で失われたものの巨大な総計に合流させられ、総合的な復興という、すべてを飲み込む実際的な問題に吸い込まれてしまう。快活さ、或いは、少なくとも、話しのしっかりした調子というものは、至る所で存在した。私は現地で百人の被災者と話をしたが、しくしく泣く声や、哀れな言葉をひとつも聞かなかった。それらに代わって、現地には、人の役に立とうとする気分が数え切れない程満ちていた。

これを、アメリカ人の特性、或いは、特にカリフォルニア市民の特性だと称賛するのはたやすい。カリフォルニアの教育は、復興は十分可能

であると考えられることを容易にしてくれる。最小限の資源もないような疲弊した国では、未来の見通しはかなり暗くなるだろう。しかし、私は、ここで書いたことは、人間性の正常で普遍的な特性であると考えたい。安全な客間やオフィスでは、人々がどのようにして、かつて、戦闘や、包囲や難破をどのように切り抜けたのか、我々は不思議に思う。その状況を想像すると、我々はぶるぶる震え、病気になり、難儀を切り抜けた英雄達を超人だと思う。身体的な痛みは、個人であれ、団体であれ、常に、多かれ少なかれ、悩ましく耐えがたいものである。しかし、精神的な哀感、苦痛というものは、いつも距離の影響を受けると私は思う。行動する現場では、すべてのものは共にかかわり合い、健康な動物的無頓着さと元気が役に立ち、認められる。サンフランシスコでは、数週から数ヶ月の間、ひどい窮乏状態が続き、神経質で健康を害した人々の一群が疑いもなく存在した。しかし、それにもかかわらず、ごくありふれた男達が、単に自分が男であるという理由で、単独でそして団体で、人の役に立とうとするこの不屈の精神を示しながら、難儀の中を突き進んだのである。

ジェイムズの二つの印象は、レベッカが表現した「災害ユートピア（パラダイス）」の基盤となるものである。

ひとつは、「混沌とした状況から即興的に秩序」を再構築する住民・被災者・市民達の自主性と能動性であり、もうひとつは「至る所に見ることが出来た落ち着き」を持って目の前の必要な課題解決に動く住民・被災者・市民達の勤勉さである。

前者をジェイムズは「軍人のような仕事ぶり」と表現し、「そうしたものは人間性に常に潜在している」と書いたが、こうした考え方は、『戦争の道徳的等価物』で示された考え方と同じものである。

後者は「人の役に立とうとする気分」と表現されているが、こうした気分は、日本でも、大災害の後に現地に訪れる無数のボランティアたちに満ちて

いるものである。ジェイムズは男を中心にしているため、「ごくありふれた男達」という表現になっているが、「道徳的な英雄」ではなく、女性を含めた普通の人々が、大災害の後の求められる活動に「人の役に立とうとするこの不屈の精神」を持って参入することを見ていたのである。

以上、ジェイムズがサンフランシスコ大地震に際して体験したこととその見聞から学んだことを、1906年6月に発行された小冊子「地震に対する心理的反応について」を中心に見てきた。レベッカは「災害ユートピア」の後に、引き続き新しい「ユートピア」建設への動きが起こることを待ち望んでいるが、ジェイムズも、戦争のない平和な「ユートピア」を建設していく手がかりを、「優れた兵士」のようなモラルと知識・技能をもつ能動的市民が生まれてくることに見いだそうとしている。我々は次に彼の講演録「戦争の道徳的等価物」に向かわねばならない。

## 参考文献

以上の説明に際しては、ウイリアム・ジェイムズ「地震に対する心理的反応について On Some Mental Effects of the Earthquake」1906、「戦争の道徳的等価物 The Moral Equivalent of War」1910（いずれも、The Library of America 38 中の William James Writings 1902-1910 に収録されている版を底本とした）、のほか、The Oxford Companion to United States History, Oxford University Press Inc. 2001、及び、ステイーブン・C・ロウ編著『ウイリアム・ジェイムズ入門～賢く生きる哲学 The Vision of James』（本多理恵訳、日本教文社、1998）、レベッカ・ソルニット著『災害ユートピア～なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか A Paradise Built in Hell; The Extraordinary Communities that Arise in Disaster』（特に、第一章「ミレニアムの友情：サンフランシスコ地震」）（亜紀書房 2010）を参考にした。

## William James in San Francisco Earthquake and Fire on 18 April 1906

Michiharu KURITA

William James endured the San Francisco Earthquake on 18 April 1906, in his house on the campus of Stanford University. He went to San Francisco, and spent four hours observing the aftermath. He went through the city again eight days later, staying for nine days, exclusively focusing on “subjective” phenomena. Here we will look over his 1906 pamphlet, “On Some Mental Effects of the Earthquake”.

Two things in retrospect struck him especially.

The first of these was the rapidity of the improvisation of order out of chaos. Many natural order-makers came to the front immediately. Much of this readiness was American, but he believed that every country in a similar crisis would have displayed it in a way that would astonish on-lookers. Like soldiering, he believed the quality lies always latent in human nature.

The second thing was the universal equanimity. In California every one was suffering, but the cheerfulness or the steadfastness of tone was universal. Not a single whine or plaintive word did he hear from the hundred victims with whom he spoke. Instead of that there was a mood of helpfulness beyond measure.

Both were, for him, reassuring as to human nature, and he came to believe that these are normal and universal traits.